



『回復期リハビリテーション病棟協会連絡協議会設立に至るまで』

～8年間から得た「モノ」～

鎌倉リハビリテーション聖テレジア病院 半沢英明・松浦舞

2010年、回復期SW有志6人で神奈川県回復期リハビリテーションソーシャルワーク研究会を発足させた。(以下KRSWと言う)

『こと』の始まりは、連携パスの運用について論じられていた頃になる。リハビリという名のもとに形上の連携で引き継がれていくやり方に違和感を覚えた。中身は急性期主導型の印象が拭えず、治療が終われば後はリハビリと、単に転院するという、目的が見えない連携パスの感覚を持った。ケースも課題が抽出できぬまま来ると言う『ケースのベルトコンベア化』(俗に丸投げと言う)に、SW連携の危機感を持ったところから始まる。そこで急性期と回復期のSWを対象に、「クリエイティブな支援とは何か、クリエイターとしてのアセスメントとは何か」をテーマに、取出涼子氏、奥川幸子氏、生方克之氏、瀧澤学氏のお力をお借りしながら勉強会を通じ課題を共有した。

2013年、KRSWに転換期が来た。丁度、回復期病棟も増えてきた頃、生活期支援者と連携を意識し始めた時期であった。多職種の生活期支援者を呼んでのシンポジウムを開催した。その質疑応答の中、回復期病棟のセラピストから、地域で働いているシンポジストにこんな質問をした。「地域で働いている方から、病院へどんな要望がありますか？」

「正直言って『余計なことはしないで』と言いたいです」
私たちは衝撃を受けた。「生活を知らない方が処方した装具や手すり、退院後は使われないことがほとんどです」「サービス調整もその方の今までの生活を無視したモノが多いんです」「だったら余計なことをしないで身体だけ良くして家に帰してあげて、と言いたくなるんです」

「そうだ！ そうだ！」と思った生活期支援者も多々いたそうだ。「回復期SWは患者さんの生活を想像しているのだろうか？」急性期を「丸投げ」と思っていた回復期も、実は生活期から同様に思われていた事実を知った。この質疑応答の中の言葉を切っ掛けにKRSWは、急性期・回復期・生活期で考える「協働作業」という縦の繋がりを意識するようになった。また、回復期SWだけの研究会であったのが、セラピストと看護師が参加し、「多職種協働」という横の繋がりが出来上がった。そしてここに急性期SWも加わった研究会

となる。

2016年、第二の転換期となった。回復期リハビリ病棟を厚労省と掛け合い、制度創設に尽力された石川誠氏と出会い、「リハビリは機能回復訓練を意味するのではなく、復権である」との教示から個人の尊厳を重視することがリハビリ医学・医療であるという提唱をKRSWは再認識させられるのである。そんな折、回復期リハビリテーション病棟協会の事務局から当研究会へ、全国回リハ連絡協議会に参加してほしいとの依頼を受け、以後、連絡協議会として、神奈川県の意味を発信できるような形となった。

2018年、新しいカタチの勉強会を模索した。当事者と支援者、みんなで考える勉強会の提示である。「活動と参加」から「主体性の再構築」へ、当事者が持つ意識を知る勉強会だ。頸髄損傷の障害を抱えた「車いすの一級建築士」として活躍されている阿部一雄氏を招いた。この時期から、もっと多職種で話し合いたいという想いから、「KRSW」から「神奈川県回復期リハビリテーション病棟協会連絡協議会」と改名した。



組織構成も、横浜市総合リハビリテーションセンター顧問の伊藤利之氏(リハ医)を会長に就任頂き、鎌倉リハビリテーション聖テレジア病院に事務局を置き、「ソーシャルワーカー部門」「セラピスト部門」「看護師・介護士部門」「広報担当」の四部門の構成とした。

これから神奈川県連絡協議会が目指すものは、リハビリ＝復権・尊厳の回復・主体性再構築の実践を急性期～回復期～生活期の多職種協働で行うこと、ひとりの患者さんのストーリー創りの裏方を3ステージで行えるよう支援の在り方を追求すること、回復期リハビリ病棟協会への問題提起など、神奈川県から全国へ発信する取り組みをしていくことが考えられる。

私たちが得た「モノ」は多職種の相乗効果で生み出す支援があることに確信を得たことと、患者さんから学ぶことが多く、支援を「受ける側」も「支える側」に成り得ること、「支える側」も「受ける側」に成り得ること。「fifty-fifty」の関係性であり、「伴に良くなる」という、フィロソフィーを得たことである。

来々、神奈川県で開催される日本医療社会福祉協会全国大会のテーマは、「ともに生きる」である。それを私たちは、当会SW部門から発信するつもりである。

去る、6月15日～6月17日に香川県高松市にて開催された全国大会へ参加してきました。

香川大会のメインテーマ「地域まんでがんソーシャルワーク～生活することを支えるために～」の「まんでがん」とは、香川の方言で標準語では「まるごと」と言い換えることができ、まさにこれからのソーシャルワークにおいて求められている「包括的」を指す言葉です。

香川大会は、医療福祉情勢や私たちソーシャルワーカーが置かれている状況・課題を「包括的」に捉え、学び、共有する大会となりました。それらを3点にまとめると、①倫理的課題やソーシャルワーカーの役割など古くから現代に至るまでの普遍的と

も言えるテーマ、②身元保証人や災害支援など近年急速な社会情勢の変化を受け、私たちに求められている新たな課題や役割、③スーパービジョンや後輩育成など専門職としての成長を目指すものであったといえます。

来年予定されている、かながわ大会では久しぶりの首都圏開催ということもあり、史上最大の参加者を目指しています。香川での学びを引き継ぎ、多様化するニーズに私たちソーシャルワーカーがどう応えていくか、共に考え、深められる場となるよう取り組む必要があると感じました。

最後になりますが、多くの参加者から「神奈川へ行ってよ

かった」と言っていただけでも、またそれぞれの力を発揮し、吸収して帰っていただくためにはまずは胃袋から！事前に観光案内やグルメ情報の提供などできるといいですね。大会まであと一年を切りました。アイデアを持ち寄り、力を合わせて大会を成功させましょう。



「どんどころ？ 川崎市コンベンションセンター」

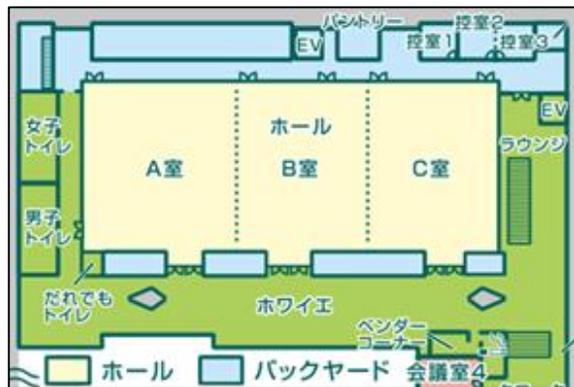
中村悦史

8月4日に、会場の「川崎市コンベンションセンター」の下見をしました。全国でもあまり例のない、駅近の高層マンションの中にあるコンベンション施設です。川崎市市内では1,000人規模のイベントや国際会議などが開けるコンベンション施設がなく、川崎市内で

コンベンション機能を受け持つ場所として今年4月にオープンしました。オープンしたばかりとあって、とにかくキレイで気持ちよかったです。メインのホールは3分割できるため、分科会では階段を使わず行き来ができました。分割



人に会った時には、おもわず立ち話が始まりそうです。この会場で、どのようなプログラムが展開されるか楽しみは膨らむばかりです。



したホールごとに、天井固定プロジェクトと昇降式の240インチスクリーンが完備されています。ホワイエも広くゆったりで、知



「調査・研究ってこんなこと」

まず結論ですが、社会科学において、100%の再現可能性及び、真理・真実なるものは存在しないということです。つまり、調査研究方法とは「どのように研究すれば事象の説明に対して説得力があるか」に尽きるのです。例えば、1万人程いる難病患者に対する支援方策構築のための調査をします。量的研究では無作為に数百人の当事者への質問紙での調査を行えば信頼性を確保できます。質的研究では10人前後の当事者へ半構造化面接を行い、グランデッドセオリーを用いて分析すれば信頼性を確保できます。両方行えば尚良しです。ただし、数十人へのアンケートや、数人へのインタビューでも、例えば基礎研究として役立つ可能性はあります。自分が明らかにしたいことを、できる範囲で方法を決めて調査研究することには意義があります。

突然ですが、皆様は「ラーメン」をお好きでしょうか。私は大好きで、大学時代は県内のラーメン屋巡りに多くの時間を費やしました。・・・半分本当です。ちなみに個人的に“みそ”味が好きです。

ここからが調査研究の話です。さて、私はみそラーメンが好きだという事実があります。ウォレス(Wallace.1971)は社会調査の過程を円環モデルとして示しました。「仮説」-「観察」-「経験的一般化」-「理論」-「仮説」と円環していくモデルです。これに当てはめてラーメンの話を展開してみます。

便宜上「観察」から説明します。高田はみそラーメンが好きだ。これは高田のラーメン注文を40年間見て分かった事実です。ちなみに研究時には観測対象を“変数”化します。変数は「高田」と「ラーメン」です。高田の変数は例えば「性別」や「年代」等、ラーメンは例えば「しょうゆ」や「みそ」等に分類できます。ある日ふと思えます。「男性」は「みそラーメン」を好き？ちなみにあるWebアンケートの結果を見ると、男性612名、女性606名に好きなラーメンの種類を尋ねた結果、みそラーメンは男性21.9%、女性17.2%でした。

この観察(参与観察)したり調べて(文献、調査、面接)分かった“傾向”を「経験的一般化」と言います。

次に、経験的一般化を理論へ変換します。変数を概念化します。例えば「みそラーメン」は「みそ」「麺」「スープ」「具」「油」「塩分」等々。コツは普遍化することです。「高田はみそラーメン好き」→「男性はみそラーメン好き」→「男性は塩分の高い食品を嗜好する」→「基礎代謝が高い生物ほど塩化ナトリウムの摂取量が多い」。すると何となく理論ぽくなります。経験的一般化から理論にいたる過程では、個々の調査結果からの帰納的推論が行われ、理論が形成されます(「帰納法」的研究)。どちらかと言うと質的研究がコミットします。

次に「基礎代謝が高いー以下略」(理論)を検証(応用)したいのですが、抽象から一般化の作業です。例えば「基礎代謝が高い」とは「筋肉量が多い」と言えます。「塩化ナトリウム」→「しょっぱい食品」→「カップ麺」等。つまり、筋肉量が多い人程、カップ麺の消費量が多いことが示唆できます。この仮説をその通りになるかどうか、例えば質問紙法等で検証する過程を「演繹」的研究と言います。どちらかという量の研究がコミットします。いかがでしょうか。調査研究ってそんなことなのです。

最後は真面目に、例えば福祉現場では、ある介入の効果を測定するための研究として、介入前後を評価指標や数値で計る実験研究法及び準実験研究法等の介入研究という方法もあります。研究方法に“これ”というものはありません。書籍で学ぶもよし、自分で考えるもよし、いずれにしても研究成果を社会に還元できることが最終目標なのです。



茅ヶ崎地区地域包括支援センターゆず
高田 麗



6月15日(金)～17日(日)の日程で、第66回日本医療社会福祉協会全国大会(香川大会)に参加してきました。私の気持ちとしては、来年のかながわ大会に向けて、注意深く視察してこようという気持ちでしたが…次期、開催県の代表ということで、何かとPRする機会に恵まれたのでご報告したいと思います。

まず、初日の社員総会では、プロジェクトメンバーの左右田さんと私が議事録署名人に指名されました。次期開催県から選んでいるようです。そして、全国医療ソーシャルワーカー協会会長会でも、議長という大役をいただきました。その上、関東ブ

ロック役員(任期2年)にも選任されました。これも、すべて次期開催県という縁あつてのものです。

2日めは「ソーシャルワーク実践Ⅰ」の座長です。7演題の実践報告がありましたが、全体としてレビューが心もとない印象がありました。実践報告の場合は、先に先行文献を調べて研究計画をたてるというよりは、まず実践ありきで、その後に成果を発表しようということになるかもしれません。しかし、それでも後からレビューを行い、自らの実践の意味や位置づけを確かめたほうがいいでしょう。かながわ大会に向けての課題を感じたところ

です。そして、夕方の交流会では、かながわ大会に向けたプロモーションビデオを流し、他県のソーシャルワーカーたちに積極的に声をかけ、かながわ大会にお越しいただくよう交流を深めてきました。

最終日は、閉会式で挨拶をさせていただきます。

そして私だけでなく、今回はプロジェクトメンバー、理事、神奈川県



閉会式後、和田香川大会長と



香川大会で配布した案内

努めました。なんと、作成した案内600部をほぼ全て配布してきました!

こんなに役割が多い全国大会は初めてで、どうすればいいかと悩むことも多かったです。いよいよ「来年はかながわ」という意識を新たに、気持ちが高まってきたところです。

みなさん! いよいよですよ!



神奈川デッサンクイズ⑤
「さて?ここはどこでしょう?」



正解は…「箱根芦ノ湖と海賊船」

「天下の険」と言われた箱根。歴史的な神奈川の玄関口です。この箱根芦ノ湖には海賊船が浮かびます。海賊船は、17世紀～18世紀に活躍した帆船船艦をモデルとしています。最新鋭の「ビクトリー」をはじめ「バーサ」「ロワイヤル」のそれぞれ特徴のある3隻があり、気持ちのよいクルーズが楽しめます。(観光かながわNow HPより)

【編集・発行】

かながわ全国大会みらいプロジェクト広報部 櫻井優光、鈴木克典、高瀬昌浩、中村悦史、長谷川知美、水野茂樹
(一社)神奈川県医療ソーシャルワーカー協会事務局 TEL/FAX 045-827-1217 E-mail: msw.kana@proof.ocn.ne.jp